

学位論文要旨

「子ども－大人」関係における音楽的相互作用に関する研究  
—乳児保育における「わらべうた」実践から—

広島大学大学院教育学研究科  
教育学習科学専攻 教育学分野

D184002 本岡美保子

本研究は、乳児保育における子どもと保育者であった筆者がわらべうたをうたい合った経験を検討し、音楽的相互作用によって構築される関係性と、音楽的相互作用に通底する意味を明らかにすることを通して、「子ども—大人」関係における音楽的相互作用の意義について提示することを目的として行ったものである。音楽的相互作用とは「二者以上の人間が情動を共有し合いながら、雰囲気やその場の空気と呼んでいるような心理的场所〔ここ〕で共存する関係において、一方は情動や、拍及び旋律もしくは抑揚に伴う動きや声を表出し、一方は表出された情動や動きや声を我が事のように受容し理解するというやりとり」のことである。

序章では本研究の背景として、子どもは生後すぐから自己が新生される過程の体験としての「新生自己感(sense of an emergent self)」を持ち、他者との「かかわり合いの領域」を広げながら対人関係を築いていくこと(Stern, 1985; Stern, 2000)、対人関係の構築には相互作用が重要であること(Reddy, 2008; Legerstee, 2005)、とりわけ「Communicative Musicality」(Malloch, 1999; Malloch & Trevarthen, 2009)が養育者との関係構築に重要であることを述べた。「Communicative Musicality」は、乳児期初期の子どもの情動、言語、社会性の発達と関連し、乳児期後期以降の子どもの音楽的相互作用においても、情動調整や言語発達、社会的発達の鍵になっていた。しかし、関係的な側面からの検討は不十分であり、音楽的相互作用によって構築される乳児期後期における関係性は、示されてこなかった。それは、客観的な指標や観察をもとにしている為であることを指摘した。その上で本研究は、筆者自身の経験をもとに、音楽的相互作用における関係性の側面を質的な分析によって解き明かすこと、その際、乳児保育におけるわらべうたに焦点化することを述べ、本研究の目的を設定した。

第1章では、乳児保育の研究及び、保育及び乳児保育における音楽的相互作用やわらべうたに関する研究の成果を概観し、保育者としての筆者の経験をもとに研究することの必然性を述べた。乳児保育研究においては、親密で情緒が調和した状態が子どもの発達に適していること(大方・玉置・マクミレン, 2015)や、身体的同調をもとにした集合的記憶が共同想起されるような親密な関係性が子どもの主体性を補償すること(菊池, 2021)が示されていた。また、乳児保育における音楽的相互作用に関する実践研究では、子どもの気持ちの高ぶりに連動してその子どもに拍節的な表現が出現すること(白石, 2006)や、保育者や他の子どもへの模倣や共振が生まれること(持田, 2010)などが明らかにされてきた。乳児保育におけるわらべうたの実践に関する研究は少ないものの、自己制御を自然に促すこと(長崎, 2006)や、仲間とのつながりを生むこと(駒, 2017)など、わらべうたが集団としてのまとまりに寄与することを明らかにしていた。また保育者が主導しながらも、子どもの自然な表現や反応を見てとり、それを取り入れながら子どもたちに返していくといった往還的な実践が描かれていた。しかしこうした研究の多くは自然観察をもとに行われているため、遊びの様子や子どもの表情、身体の動きなどは丁寧に描かれていても、当事者以外にはわからないような感情の機微までは描かれておらず、うたい合うことによって子どもと保育者との間にどのような関係が構築されていったのか、またうたい合うことが関係構築にとってどのような意味があったのかといった点も捨象されていた。一方、保育者としての経験の記述をもとに、わらべうたをうたい合うことによって子どもと保育者との関係構築を示唆した研究(横山, 2001; 横山; 2002; 和田, 2008; 本岡・七木田, 2018; 本岡, 2019a; 本岡, 2019b; 本岡, 2021)もあり、わらべうたのうたい合いが、子どもと保育者との関係構築に対してなんらかの意味を持つ可能性があることが明らかとなっていた。しかしこれらの研究は、幼児の保育実践(横山, 2001; 横山; 2002)や、対象児が限定されているもの(和田, 2008; 本岡・七木田, 2018; 本岡, 2019a; 本岡, 2019b; 本岡, 2021)であるため、本研究では対象児を限定せずに、乳児保育における子どもと筆者とのわらべうたのうたい合いそのものを対象として研究を行うことで、関係的な側面からみた、わらべうたをうたい合うことの意義を見出したいことを述べた。

第2章では、自己の経験をもとにした研究において目指すべきものとは何か、研究者の主観性をどう扱うべきか、一事例研究の意義とは何かの三点を検討した上で、自己の経験をもとにした保育研究の批判的検討を行った。自己の経験をもとにした研究には、保育者としての研究者自身の内面が如実に現れ、その経験の当事者にしかわからないような感覚、例えば保育性といった保育に関するものの考え方(佐藤, 2011)などが示されていた。こうした研究は、客観的な観察や実験などでは突き止めることのできない側面を明らかにできるとして評価される一方で、方法としての不備や方法論の検討不足が指摘されてきた(鳥光・山内・中坪・小山, 1999; 濱名, 2018; 阿部・吉田, 2020; 阿部・吉田, 2021a, 阿部・吉田, 2021b)。以上を踏まえ、本研究は自己の経験をもとに行うからこそ、理論的背景から方法までを貫く理論的枠組みの提示が必要であることを述べた。

第3章では、本研究の理論的枠組みとして Eugene T. Gendlin(1926-2017)による「経験的現象学」を提示し、分析方法についても詳述した。「経験的現象学」は、「interaction first」と考えることで現象学における主客一致の問題に回答し、フェルトセンスと言語シンボルとの相互作用によって現象や現象の理論構造を言語化する過程を示すことで、研究者の言語の恣意性を取り払うことができる。「経験的現象学」に依拠した分析方法としては THINKING AT THE EDGE(以下 TAE と表記する)(Gendlin, 2004)があり、TAE の分析手順に沿うことで実例としての経験の記述から理論構築までを行うことができるため、これを採用した。TAE では、身体感覚から経験の意味の中心を立ち上げ(パート1)、実例からパターンを取り出し、さらにパターン同士の関係から新たなパターンを創出することでその現象の理解を深め(パート2)、シンボル化された言葉を用いて理論構造を示し、図やメタファーの力も借りながら読者と理論を共有する(パート3)。このようにして、自己の経験からの理論構築、及び読者との共有までが可能となる。

第4章では、研究対象及び方法、倫理的配慮を提示すると共に、経験の記述として「エピソード記述」(鯨岡, 2013)を採用することを述べた。さらに章ごとの分析方法を詳述し、分析に用いる分析シート(得丸, 2010; 得丸・小林, 2015)の使用方法についても解説した。以降では、「エピソード記述」に記載された筆者を分析のために取り出す際には、これまでわかったつもりでいたことを問い直す(藤井, 2019, ix)という意味で鉤括弧付きの「私」と表記し、筆者が記述した「エピソード記述」は鉤括弧なしのエピソード記述と表記する。

第5章では、子どもと「私」のわらべうたをうたい合う経験の質感を示すことにより、音楽的相互作用によってどのような関係性が構築されるのかを明らかにした。エピソード記述に描かれていた、子どもと「私」がわらべうたをうたい合った経験は12のテーマに分かれ、そのテーマをまとめた五つのカテゴリー、「ゆるみ」「楽しさ」「慰め」「能動性」「与格」ごとに、どのような経験だったのかを考察した。「ゆるみ」とはうたい合いの繰り返しに身を委ね、保育者を抛り所としながら自由に漂うように振る舞うこと、「楽しさ」とは他者にもつながって行く可能性を秘めた、生得的で潜在的な相互作用のスキルに伴うポジティブな感情が表出すること、「慰め」とは悲しみによって失われた領域がうたい合いによって満たされることで子どもの気持ちが軽くなること、「能動性」とは周りを巻き込みながら調和するようなものと、保育者との関係に執着し感情を崩すことで浄化しようとするものの二つの側面があること、「与格」とはうたい合いの中で蓄積されたものが実感として感じられることや、うたい合いによって生まれた新たな気づきが波紋のように広がることである。この結果から、音楽的相互作用において構築される子どもと保育者との関係性は、「身を委ねて自由に振る舞い、ポジティブな感情表出が可能となるような関係性」、「周囲の他者を巻き込みながら他者と調和したり、新たに他者との関係を築こうとしたりすることに向かうような関係性」、「悲しみが緩和されたり、あえて感情を崩して負の感情を浄化したりできるような関係性」であると考察した。ただし「悲しみが緩和されたり、あえて感情を崩して負の感情を浄化したりできるような関係性」が顕在化するかどうかは Narrative に依存していたため、必ずしも構築されるとは言い切れなかった。そこで、音楽的相互作用の中に含意されているものとした。「身を委ねて自由に振る舞い、ポジティブな感情表出が可能となるような関係性」や「周囲の他者を巻き込みながら他者と調和したり、新たに他者との関係を築こうとしたりすることに向かうような関係性」といったポジティブな関係性と、「悲しみが緩和されたり、あえて感情を崩して負の感情を浄化したりできるような関係性」という、どちらかといえばネガティブな関係性は、矛盾する関係のようにも感じられる。しかし Narrative の中で揺さぶられることによって波紋のように広がり、気付けばそうとしか言いようのないような関係として互いを結びつけるところに、音楽的相互作用における関係性の特徴があるのではないかと考えた。

第6章では、わらべうたをうたい合うことに通底する意味とは何かを探究した。まず、第5章で導き出した経験の質感をもとにフェルトセンスを感じ直し、わらべうたをうたい合うことの意味の中心を「揺るがない踏み台を作る営み」とした。次に、それぞれのエピソード記述に含まれるパターンを抜き出し、それらのパターンを交差することによって新たなパターンを創出した。パターン及び新パターンは合わせて178になり、これらを用いて、わらべうた、「私」、子ども、わらべうたをうたい合うことと、子どもと「私」との間にあるものを、それぞれ説明した。さらにここまでの分析をもとに重要語を抽出し、重要語からなる構造文を選定した。構造文より、わらべうたをうたい合うことの意味は、「結ぶ」というささやかな願い、「いきいき」とした身体の動きによって「全身全霊」で「応える」という「循環」、「喜びの実感」が湧き上がり「ほとぼしる」こと、いつか「離れる」

ことを受け入れること、の四つで構成されていたことがわかった。わらべうたのうたい合いに現れる「結ぶ」というささやかな願いには、一対一での身体接触を伴った安心感や心地よさを相互に求め合い、精神的な苦痛の緩和やその子の対人関係の育ちを願うという意味があった。「いきいき」とした身体の動きによって「全身全霊」で「応える」という「循環」には、子どもが主導権を握り保育者が維持することで、子どもに対人関係を構築していくための踏み台や、生きていく原動力をもたらすという意味があった。「喜びの実感」が湧き上がり「ほどばしる」ことには、子どもと保育者の関係を強く結びつけることと、子どもの対人関係を拡張するという二つの意味があり、保育者と子どもとの関係に限らず、子どもの対人関係全般に適用できる可能性が示唆された。「離れる」ことを受け入れることには、関係性の成熟の結果として、保育者が、子ども同士の関係や、その子どもと他の保育者との関係の後景に退くという新たな関係性へと変容する分水嶺としての意味があった。上記をもとに、音楽的相互作用に通底する意味は、「子どもが主導権を握り保育者が維持するという関係の中で、互いが音楽性を感じ取り、拍節感に伴う身体の動きを相互に繰り返すことで、子どもに対人関係を構築していくための踏み台や、生きていく原動力をもたらす」ことと、「呼吸を合わせて唱える心地よさや、音楽表現に呼応してもらおうといった喜びの実感が、子どもと保育者とのあいだで伝わり合い同期することが互いの関係を強く結びつけるとともに、子どもの対人関係を拡張する」ことであると結論づけた。さらに、顕在化するか否かは対人関係の育ちへの願いや分離への意識に依存するものの、音楽的相互作用に含意されている意味としては、「一対一での身体接触を伴った安心感や心地よさによって精神的な苦痛を緩和し、その子の対人関係の育ちを願うことで互いの分離を受け入れ、保育者が子ども同士の関係の後景に退くことで、子どもが新たな対人関係を構築していくことへと向かっていく」という意味があることを述べた。

終章では結果をもとに、乳児保育における音楽的相互作用の意義と、「子ども－大人」関係における音楽的相互作用の意義を考察し、本研究の限界を述べた。乳児保育における音楽的相互作用の意義の一つは、音楽的相互作用によって構築される関係性が、他者と共に生きていくための力を養うことである。これまでの研究の中では、大人が主導し子どもがそこに追随するかのような関係性が浮き彫りとなっていた。しかし本研究で明らかにした関係性は、むしろ子どもが主導し、周囲を巻き込みながらも調和するような生命力に溢れたものであり、自由でポジティブなものであった。また、あえて感情を崩して負の感情を浄化したりするようなことのできる、一見すると子どもに振り回されているかのようなものになる可能性も秘めているものであった。こうした矛盾するかのような二つの関係性は、揺れながら波紋のように広がり、構築されるというよりはむしろ、気付けばそうとしか言いようのないような関係として互いを結びつけ、他者と共に生きていく原動力を生み出していた。その場限りの親密さや調和を志向しているのではなく、子どもの生活全般において様々に揺さぶられながら他者と共に生きていくことを志向するものであり、そうした関係性の中で子どもは、他者と共に生きていくための力を養うのではないかと考えられる。ただしそこには、音楽的成長にだけに収斂することのない、他者と共に生きていこうとする子ども自身の願いと、子どもの生活そのものの充実や他者との関係を構築してほしいという保育者の願いがあることによって、他者と共に生きていくための力を養うという意義を持つと考えられる。

乳児保育における音楽的相互作用のもう一つの意義は、音楽的相互作用が分離を前提とした親密さを築き、子どもの対人関係を拡張する可能性があることである。これまで乳児保育研究においては、親密で情緒が調和した状態が重要視され(大方・玉置・マクミレン, 2015)、親子関係における親密さとの質的違いは明らかにされてこなかった。乳児保育における関係性が親子関係と違うのは、分離が前提とされていることであり、だからこそ、保育者は全身全霊で子どもに応え、子どもも全身全霊で保育者に応えるという循環が生まれる。分離を前提とした親密さは、同じ一つのうたを分有したつながりによって醸成されるため、喜びの情動の共有や、拍感の共有といった「Communicative Musicality」のスキルに基礎付けられて、子どもの対人関係は拡張し、別の他者との関係へと、保育者から離れていくことができるのである。

「子ども－大人」関係における音楽的相互作用の意義とは、第一に、音楽的相互作用によって、分離が含意された親密さを築くことで、子どもの能動性や主導性を高めることができることである。これまで、ヒトは他の霊長類に比べてアロマザリング<sup>52)</sup>が発達している(根ヶ山・柏木, 2010)と言われてきたにもかかわらず、「子ども－大人」関係は、アタッチメントのような緊密性や密着を基本とする関係性で説明されることが多かった。根ヶ山(2010)は、親との分離をもたらす意義を、周囲の社会的接触をもたらすこととし、近年強まっている親の

子どもに対する保護的関わりが、子どもの能動性・主導性を総体的に減じることになるのではないかと警鐘を鳴らしている。このことは、「子ども—大人」関係においても同様であり、親密になることと大人と分離することは、決して相反するものではなく、「子ども—大人」関係の親密さの帰結としての分離が重要なのである。

「子ども—大人」関係における音楽的相互作用の意義の第二は、音楽的相互作用が、互いに応えようとする思いや、対人関係に関わる願いに基づいて、「育とう」とする子どもと「育てよう」とする大人を生み出しながら、他者と共に生きていこうとする営みになる可能性があることである。互いに音楽性を感じ取り、拍節感に伴う身体の動きを相互に繰り返すことで、安心感や心地よさ、音楽表現に呼応してもらおうといった喜びの実感が同期し、それが他者にも伝わるといった音楽的相互作用は、その場の関係を親密にするだけでなく、子どもに、他者とともに生きていく原動力をもたらすものであった。それは、Stern (1985) が述べるような生氣情動に対する調律を含みながらも、その場限りの力動的な変化だけを示しているのではない。また、Treverthen (1979) が示したような、即時的な間主観的な相互作用だけで説明できるものでもない。音楽的相互作用がまずあって、子どもの「育とう」とする育ちへの願いや、大人の「育てよう」とする育ちへの「願い」がそれぞれを切り分けていくプロセスである。だからこそ、他者とともに生きていく原動力をもたらし、他者と共に生きていくことへと向かうものであった。しかし、そこに分離への意識や、他者との関係構築への願いがあるかどうかによって、他者と共に生きていこうとする営みになるかどうかが決まってくる。この点で、可能性という表現にとどめた。以上をもとに、本研究における音楽的相互作用を図示した (図1)。

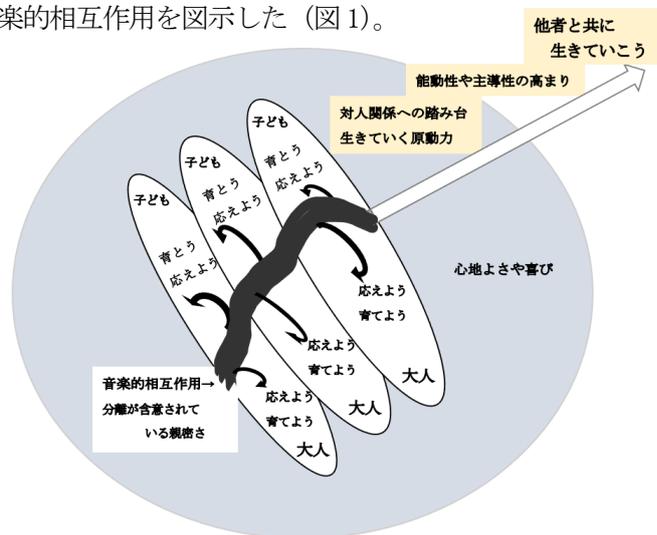


図1 音楽的相互作用

本研究の限界は、以下の三点である。一点目は、わらべうた実践の直後に分析していないため、経験からの距離がとれ、実践者としての意図を含めずに研究者として分析できた一方で、直後に感じたであろうフェルトセンスが組み込めていないことである。二点目は、研究目的に鑑みて関係性に着目したため、子ども一人ひとりが抱えるや問題等が背景に退いていることである。三点目は、Narrative を決定づけたものが何だったのか、Pulse や Quality といった「Communicative Musicality」の要素なのか、それとも乳児保育におけるわらべうたという状況だったのか、といった点について吟味できなかったことである。そのため、「悲しみが緩和されたり、あえて感情を崩して負の感情を浄化したりできるような関係性」が構築されることは、どの音楽的相互作用にも言えることなのかは明確にできなかった。そこで本研究では、こうした関係性が生まれる可能性があるという、音楽的相互作用に含意されているという結論になった。

なお、TAE のパート3の最後であるステップ14は、作り上げた理論を自分のフィールドの中で説明し、これからの研究の中でさらに練り上げていくことである (Gendlin, 2004c)。そのためこの研究は今後も続いていく。

## 主要参考文献

Gendlin, E. T. (2004) THINKING AT THE EDGE (TAE) STEPS, *The Folio*, 19. (1), 12-24.

<http://previous.focusing.org/pdf/TAE-Steps-From-The-Folio-2000-2004-crp.R6.pdf> (閲覧日 2022. 10. 9)

Malloch, S. N. (1999) Mother and infants and communicative musicality. *Musicae Scientiae* (Special Issue

1999-2000), 29-57.

Malloch, S.N. & Trevarthen, C. (2009) Musicality:Communicating the vitality and interests of life. In Malloch, S.N. & Trevarthen, C. ( Eds. ) , *Communicative Musicality: Exploring the Basic of Human Companionship*. New York: Oxford University Press. 1-11.

得丸さと子 (2010) ステップ式質的研究法 TAE の理論と応用. 海鳴社.

和田幸子 (2008) わらべうたを用いた障害児保育実践－「遊びの構造分析」による事例の一考察－. 保育学研究, 46 (2), 225-234.